

《参加者の想い・感想》

[自治労飯田市社会福祉協議会職員労組・今村 真悟]

第16次連合長野復興支援ボランティアに、参加させていただきありがとうございました。

初めて訪れた宮城県南三陸町。いつかは行かなきゃ！と思っていた職員の方が住民への避難を呼びかけ続けた防災庁舎。

時がたち、テレビでの報道も少なくなっており、多くの人の心から、あの震災が薄れていっているであろう今、南三陸では、家の基礎だけが残った周りの道を子どもたちが日々通学している。この子どもたちは、いつもこの状況を見、あの時を思い出しているのではないだろうかと考え、心が痛くなりました。

ボランティア活動では、農業支援として行った農地の石撤去。とても一度や二度では拾いきれない毎日毎日たくさんのボランティアが作業して少しずつ農地として蘇っていく…一人の力は小さいけれど、百人寄れば寄っただけの、千人なら、一万人なら……まだまだ被災地では多くの方の小さな力を必要としています。

「いつまでも忘れない」言葉で言う事は簡単ですが、忘れないために何ができるのか。日々の暮らしに甘えることを止め、小さな力を被災地のために使おう！と考えながら帰ってきました。

今回で連合長野の復興支援ボランティアが最後だという事、とても残念に思います。私一人ではできなくても、連合の皆の力を借りれば、何かができそうな気がする。企画される方は大変ですが、もう少し「何か」をやりましょう！

[電力総連中部電力労組飯田支部・宮澤 憲二]

あれほどの大震災があつて多くの方々が亡くなり、何もかもが壊れて流され、通常的生活一変してしまったあの出来事を、しばらくの間、現実のものとしてとらえるのは困難でした。

いくらテレビ・新聞で見ても、「本当にあんなことが……」としか思えなかったのです。

「義援金によるサポートでは不十分、できれば現場にかけつけたい」という思いは強かったのですが、具体的に行動するまでには至りませんでした。そんな中、偶然目にした連合長野のツアー募集の回覧。パッと手に取り直ぐに申し込んで参加が実現したという次第です。以外なことに家内や職場の同僚は喜んで送り出してくれ、皆心の底では「できれば自分も行きたい」という気持ちがあるんだなと感じました。

今回私が行った作業は、限りなく「無」に近いものだったと思います。「微力だが無力ではない」と誰かが言っていましたが、全体からみれば殆どゼロの労力でしょう。あまりにも被害の規模が大きすぎるのです。少しばかりの手助けで申し訳ない気持ちも生じてきました。しかしそんな私に、今後できる大切な事を地元の方から教えられ、今後続けていこうと心に決めたことがあります。「震災のことを忘れない。復興の状況に関心を持ち続ける」ということ。

このツアーに参加してすぐに驚いたことがあります。多くの方がボランティア活動に何度も参加しているという点です。初参加の私には信じられませんでした。日程も半ばを過ぎると何度も足を運ぶ人たちの気持ちがわかった気がし、そして帰路のバスの中では私の気持ちもすっかりリピーターになっていました。メンバーの中には一言も言葉を交わすことのなかった人もいましたが、皆、同じような心境になっていたように感じ取れました。自然な流れですが、実に不思議な感覚です。

長距離の退屈するはずの車中で、円熟した話術と企画で自然と皆の一体感を醸成していた成沢さんと長電の三木さん。ハードなスケジュールでしたが、全てがスムーズに進められ事務局には感謝です。

色々な意味でこの復興支援ツアーに参加できて本当に良かったと思っています。ありがとうございます。

[基幹労連 I H I ターボ労組・下山 裕美]

初めて復興支援ボランティアへ参加させて頂きました。震災から丸2年経った今、現地では何が必要とされているのだろうと思いながら南三陸町へ向かいました。

今回は、農地支援で畑の石拾いと漁業支援としてメカブ削ぎでした。畑では、大勢の人で一斉に整備を行いましたが、これからもまだまだ人の手が必要なんだと思いました。2年経ってもまだ作物を作る事が出来ない事に驚きもしました。

街は何も無く、ところどころに津波によってぐにやりと曲がったまま残っているガードレールや、鉄骨のみの防災対策庁舎などを目の当たりにし、ある程度はメディアで見ているもののやはり大きな衝撃を受けました。さんさん商店街での芳賀さんのお話や、漁港での漁師さんの話を聞かせていただき、津波の恐ろしさを改めて知りました。命あるから、生きているから、復興していくんだという想いに、聴いている私が勇気づけられました。

今後も、ボランティアでも観光でもどんな手段でも、また行きたいと思います。

[基幹労連 I H I ターボ労組・中川 友子]

今回、宮城県南三陸町で活動させていただきました。車中の話では南三陸町は仙台市から離れている事もあり、あらゆる面で、復興が遅れているとの事でした。実際、塩水を被った樹木は枯れており、津波が襲った所はすべて更地で、あるのは、鉄骨の建物の骨組みや曲がったガードレール、廃棄されるだろう漁船の山、鉄骨の山ぐらいで後は、広大な更地でした。

3日目の活動で、地元の漁師方が、津波は本当に怖いと、どんな高価な物があっても命が無ければどうしようもない、とにかく逃げる事、これだけは忘れないで帰ってほしいと言われました。

3日間の活動を通して、被災地の現状を見て、被災を語る被災者の話を聞いて、復興にはまだまだ時間がかかる事を知りました。メディア等では、明るい復興の話題も流れるけれど、実際は資金の面でも、人手の面でも支援が足りていない現状を知りました。まずは震災があった事を忘れない事。一人の力など微力だけれど、決して無駄にならないことを信じて、自分にできる方法で、復興支援していければと思います。

[基幹労連 I H I ターボ労組・水野 徹]

遅ればせながら、東日本大震災復興支援ボランティア南三陸町への活動に初めて参加させていただきました。

震災より2年2カ月が経ち、メディア等の報道が少なく成ると共に、自分の記憶も薄れる中で訪れた南三陸町でした。

3日間という短い滞在ではありましたが、その中で目の当たりにした何もかも流されてしまった町並、未だに片付いていないがれきの山。

肉親と家を失いながらも私達にお話をしてくれた語り部の芳賀さん。

「やっと仕事ができるようになったんだよ」と言って、めかぶの取り方を教えてくれた仮設住宅から通うお母さんとの出会い。

「南三陸町に来たからには、このことだけは憶えて帰ってくれ」と漁師の親方が話してくれたこと。

「海沿いに来て地震が起こったら、すぐに高台に歩いて逃げる事。何があっても戻るな、一人で逃げろ」・・・命の大切さ、生きる事の大切さを教えていただきました。

そして、防災センター前で月命日の黙祷ができた事も、私にとって意味深いものでした。

このボランティアを通して経験した事、見た事、聞いた事を周囲の人達、又家族に伝えていく事が大事だと思いました。今回きっかけを作っていただいた連合長野事務局・成沢さん、長野電鉄・三木さんに感謝いたします。

そして、まだまだ時間のかかるであろう震災地の復興と被災された皆様の福幸を、これからも応援したいと思います。16次の皆様3日間ありがとうございました。

[基幹労連 I H I エアロマニューファクチャリング労組・平 次朗]

今回初めてボランティアに参加させていただきました。

友人が岩手県大槌町に居まして、その友人とご家族は被災しなかったのですが、親戚の方と会社の同僚の方が犠牲になられたと聞いて、自分にも何か出来ることは無いかと思っていました。その一方で自分が行って力になれるのか？足を引っ張るのではないかと、行けない理由を探している自分がいました。そんな時に今回の参加募集があり、参加させていただくことが出来ました。

現地に入って目に映ったのは、まるで大きな川の河原に来たような光景でした。鉄骨だけの建物と建造物の基礎だけが、ここに街があったことを示していました。その光景に何ともいえない気持ちになりました。

一日目と二日目は農地に残った石や瓦礫などを取り除く作業でした。見た目には大分綺麗に見えたのですが、少し掘るとまだまだ石や瓦礫が出てきました。本当に綺麗な農地になるのか不安になりましたが、現場リーダーの方の「今まで沢山の方が来て手を掛け、ここまでの状態になりました。皆さんのような方々が来てくれる限り、南三陸町は必ず復興します！」というような言葉に自分も少しは役に立てたのかなと思いました。

三日目は漁業支援ということで、メカブの刈りや運搬、計量などの作業でした。自分がミスをしたときに「すみません」と謝ると、漁師さんがこう言いました。「そんな謝ることなんかねえ、わざわざ手伝いに来てもらってんだから」。その言葉に自分達を温かく受け入れて下さっているのだと思いました。両親の皆さんたちは、元々この日はお休みだったみたいですが、自分達が行くということで仕事に思い出していただけたらいいのです。さらに作業後にはワカメまでいただき、申し訳ない気持ちと南三陸町の方たちの温かさを感じました。

初日のさんさん商店街での語り部の芳賀さんと最終日の漁師さんの代表の方から現地の生のお話を聞くことが出来、改めて津波の恐ろしさを再確認しました。また、思い出すのも話すのも大変辛いはずですが、震災の体験談を多くの人達に伝えようとする想いに胸を打たれました。

今回で連合長野としてのボランティア活動は最後になるようですが、世間的にも縮小傾向にあると思います。ですが、今回ボランティアに参加してみて、まだまだ支援は必要だと今まで以上に感じました。今はまだまだ支援の灯火は消してはいけないと思います。復興が完了し灯火を消せる日を一日も早く迎える為には、地道な作業がまだまだ必要だと感じました。

また、ボランティアセンターの駐車場で神戸や姫路ナンバーの車を目にしました。阪神・淡路大震災を経験されたからこそその支援活動に頭の下がる思いと同時に、自分も機会を探しボランティア活動に参加していかなければと、改めて思いました。

また、被災地を見たことの無い知人達と南三陸町をはじめ被災された地域を訪れ、多くの人に生で見て知って感じてもらうことで、支援を呼びかけることに繋がっていくと思いますので、こういう形でも力になれていたらと感じました。

現地の方達にとっては、あれから約2年2ヶ月経ったなかでの三日間だけの作業でしたが、一緒に作業させていただいた参加者の皆さんと共に大変貴重で勉強になる体験をさせていただきました。

最後になりましたが、事務局の成沢さん、長電観光の三木さんとドライバーのお二人、ご一緒させていただいた皆さん、お世話になりました。ありがとうございました。

[基幹労連 I H I エアロマニューファクチャリング労組・増澤 好文]

日本中を震撼させ多くの人命を奪い大被害をもたらした2011年3月11日の東日本大震災からもう2年2ヶ月にもなります。

今回参加をし現地を見て、「もっと早く参加すれば良かった」そう悔やまれます。

若葉が茂る新緑の林を抜け坂道を下ると周りの景色が少しずつ変わってきました。左右の杉の木でしょうか松の木でしょうか海の塩水に浸かり木々が枯れ田んぼも畑にも雑草もなく、ここまで海水が押し寄せたことがはっきりと見て分かります。

此处からが宮城県南三陸町ですと紹介されましたが、それはもう信じがたく何もない灰色の世界、テレビで何度も見たあの光景が見に浮かびます。なすすべもなく自分の家屋や車が波に飲み込まれていく見ているしかない辛いあの映像です。

さらに進むと目にしたのが、がれきの中に立つ赤い鉄骨の建物でした。

成沢さんから聞き、又資料でも目にした赤い鉄骨の悲劇の防災庁舎です。見るも無残に壁が波に剥がれたこの庁舎の屋上に30人が上がり10人が助かり20人が仲間の目の前から波に飲み込まれて行ったと聞きました。亡くなられた人も生き残った人はなおさら辛くその苦しみははかりしれないものだったと思われまます。

1日目の作業は塩水被害の畑に塩水土壤を和らげるため山から土を運び入れ撒いてあるのですが、その中には石が多くその撤去作業をさせていただきました。

帰りに「さんさん商店街」にて語り部の芳賀タエ子さんによる大震災当時のお話を伺いました。自分の兄弟もなくされ、家も奪われ、うなされて何日も眠れず、何度も町を出ようかと悩んだそうです。でもこの町を離れなかった此处でがんばる。きっと立て直すんだからきっと又来て下さい。それが私達の力になりますと言われた言葉が忘れられないです。

二日目も同じ作業です。大学生でしょうか若いグループと一緒にでした。あいにく雨でしたが、ずぶ濡れになりながらも必死に作業をする姿を見て心が熱くなり、又一人一人微力でも無力ではないと言われましたが、平らになっていく畑を見るとまさに実感しますし地味な作業ではありますがまだまだ多くのボランティアを必要としていると感じます。

三日目は港の作業でした。「若い衆がいなくて来てくれる助かよう」って言いながら爺ちゃん婆ちゃん達が出迎えてくれて和やかな中にも最後に言っていました。「命が大事だ。金やダイヤ探したら逃げ遅れる、自分は自分で守れよ、生きてなきゃだめだ、2年も経つのに家もねーけどなハハハ」。笑っていいのか悪いのか？生きた教訓ありがとうございました。

南三陸町の皆さん、大変お世話になりました。是非、又行きたいと思います。

あの日から2年。写真で見た南三陸町は緑あふれる穏やかな港町。今回ボランティアで見た今だ住める状態ではないあの場所の早い復興を願い遠い長野の地からも力になりたい。

又、人の手を借りたい所はまだまだある訪れる事だけでもボランティアになると言います。チャンスがあれば是非行きたい、微力ながらお手伝いしたい。そんな気持ちです。

南三陸町を訪ねて思う事

[基幹労連 I H I エアロマニューファクチャリング労組・川手 正博]

昨年11月の第13次に続き、第16次復興支援ボランティア活動へ参加させて頂きました。

今回は、南三陸町での活動でした。海岸に近づくにつれ、車窓から見える景色が一変してきました。明らかにここまで津波が来たという形跡が一目で分かる位残っており、被害の大きさが分かりました。海岸から数キロ内地へ入った所でも数メートルの高さで被害の形跡が残っていました。前回お邪魔した仙台市若林区とは少し様子が違っており、ここ南三陸町は、海岸からすぐ近くに山間部があり、地形の変化で津波の高さへの影響が、かなりあったのかなと素人でも分かる現場でした。

活動内容は、初日と2日目は畑や田んぼの中にある石や瓦礫を拾う作業を行いました。

除塩が間に合わず、山か？川か？何処か別の場所から運んできた土で再起する様子が伺え、復旧はかなり遅れている事が分かりました。ここで農家の方のお話を聞く事が出来ました。

昭和35年のチリ地震の時と、引き潮の差を比べてしまったとの事。

「津波は5、6回は来たかなあ」と、当時の様子を細かく教えて頂きました。

3日目は、志津川漁協で、メカブを茎から取る作業でした。初めて行う作業でしたが漁協の方より親切に教えて頂き、なんとか作業が出来ました。

港で海風が少し冷たかったのですが、カモメの鳴き声が聞こえる中、大変良い貴重な社会勉強となりました。

作業終了後、漁協の親分さんから、私達に大切な2つのメッセージを聞かせてくれました。

まず、「命を大切にしてください!」、災害等で避難する場面が来たら、まず自分の命を守る事を最優先してくださいとの事。時には家族の心配もしてはいけない、まずは自分自身と、仰っておりました。

次に、「南三陸町の事を忘れないで欲しい、そして、また此处へ来てください」と、声を詰まらせて仰っておりました。

このメッセージの意味をしっかり噛み締めて、これからの行動に反映したいです。

この漁港から見える南三陸町の景観は、更地が広がり

震災前にあったはずの街並みは全く確認することができませんでした。

ここには、街がり、文化が有り、人々の笑顔が確かにあったのに・・・。

街全体が消えてしまっていました。



南三陸町さん商店街での語り部の方のお話、大変衝撃的でした。身内が津波に襲われてしまった、とても辛い出来事であるのに、私達にお話して頂いたのは、私達に色々なメッセージがありそのメッセージを受け止めなくてはならないと思いました。

今回、南三陸町へ来て、改めて感じた事は、被災地はまだ震災真最中で復旧復興は何も始まっていないという事が分かりました。長

野に居ると東北の事は点でしか見えて来ません。大変辛い所です。

私達に出来る事は、震災前の生活に戻るまで東北を応援し続ける事ではないでしょうか！？

どんな形でもいい、東北の復旧復興に貢献していきたいと思いました。

3日間、大変お世話になりました。同じ志のある40名と共に活動出来た事は、私の宝になりました。連合長野、成沢さん、長電観光、三木さん、バス乗務員の皆様、大変よい機会を作って頂き、ありがとうございました。大変お疲れ様でした。

命を守ろう

[基幹労連 I H I エアロマニューファクチャリング労組・有賀 栄治]

今回は2度目のボランティアと言う事で前回同様しっかりやろうと思って参加しました。南三陸町を見て瓦礫は何も無い状態でしたが、実際は復興には程遠いを見て、国は何をしているのかと腹立たしく思いました。

さんさん商店街の語り部の芳賀さんのお話を聞き、息子さんを始め肉親を亡くされているにもかかわらず辛い話を聞き共感しました。私も娘を病で亡くしているので、涙が止まりませんでした。

又畑の近くの農業をされている方のお話で4~5年かかってやっと作物が出来る様になった。3日目の漁師の親方の話で復興が進んでいない事。まず命を守る事等お聞きして毎日の生活や仕事の中でも安全に気を付けて自分の体を傷ついたり命を落とす様な事をしないように気を付け命の大切さを改めて感じました。

今回のボランティアで連合長野としては終了ですが、今回の参加者4名で又行こうと決意しました。

[自治労長野県職員労組諏訪支部・井口 渉]

初めて訪れた南三陸町の中心部は、がれきはほとんど撤去されていましたが、とても静まり返っていました。重機が動いて、瓦礫の分別作業が進められ、ダンプが行きかう、そのような光景を予想していたので、あまりの静けさにショックでした。

既にこちらへ何度かボランティアに来られた方に話を伺ったところ、町の中心部が津波に襲われてしまい、いろんな機能が失われたこと、仙台市から車で2時間かかるという地理的要因もあり、なかなか支援の手が入らず、復興のスピードが遅いとのことです。

このような中、何か引っかかるものを感じながら作業をしておりました。

三日間の行程で、印象に残ったお話が三つあります。

さんさん商店街において芳賀さんが語って頂いた「自分の体験を話したくても周囲の方と体験の過程が違って、なかなか語れなかったこと、やっぱり南三陸町が好きであるし、旦那さんに背中を押されて今こうして語り部として皆さんに話をしていること」。

ボランティアセンターのスタッフの方のお話では「自分も現場に行って作業をしたいが、なかなかセンターを運営するスタッフがいないので、やりたい作業は、いっぱいあるのですが。」

最終日の漁業支援が終わった後、漁業関係者の方から皆に一つだけ覚えていてほしいと言われた「ご覧の通り、津波は全てをなくしてしまう。だから津波が来たらまず逃げろ。命あれば後は何とかなる。」

これらのお話は南三陸町の現状を印象づけてくれました。

その地域、その土地の様々な現実と考え方があり、心を寄せている方が何人もこちらで活動してお

り、当所、他の地域と比較してしまった自分を恥じています。そして、まだまだ南三陸町では復興の手が足りていない。自分はそれに対してどのように行動していけるのか、考えさせられました。

[電力総連関西電力労組木曾川支部・新田 貴久]

ボランティアに参加された方々お疲れさまでした。

今回は、前回と同じく南三陸町でのボランティア活動でしたが景色は二ヶ月前とあまり変わっていません。改めて復興が進んでいないと実感しました。

また、今回初めて漁業関係のボランティアをさせてもらい本当に貴重な体験をさせていただきました。そこで働いていた人も津波の被害に遭われていてその時の話を聞かせてもらいより津波の恐ろしさを感じました。

私達の住んでいるところでもどんな災害が起こるか分かりませんがその際は、ボランティアで学んだことを活かしていきたいと思います。

今回で復興支援ボランティアは終了するとのことですが現地に行かなくても出来ることがあると思いますし、今度は観光でも行って見たいと思います。

また、このような機会があれば是非参加していきたいと思います。

[電力総連関西電力労組木曾川支部・小川 元気]

私はボランティア活動と東北へ行くことが初めてのことでした。

現地に着き鉄骨だけがのこっている役場や壊れた橋、隅に固められたがれきの山を見て復興はまだ進んでいないことを痛感しました。

初日と二日目のボランティア活動は畑の石拾いで最終日は港でめかぶの仕分け作業。中でも一番印象に残っているのは最終日でした。港には元々働いていたおじさん、おばさんが居て、おじさん達は頑固親父を連想するような風貌でした。初めは少し緊張しました。しかし作業が始まるとおじさんの方から話しかけてくれて気楽に作業をすることができて、時間がとても短く感じた最終日でした。

ボランティア活動を通じて感じたことは、現地の人達がとても強いということです。被害に遭い辛いことがあってもめげずに頑張っている人達を見て心を打たれました。これからは今回の活動をより多くの人に伝え東北にもっと関心を持ってもらうこと、東北の名産品があればどんどん買うことをしていきたいです。

今回の活動は初めてでしたが、忘れられないものになりました。本当にありがとうございました。!!

[電力総連関西電力労組木曾川支部・杉本 雄平]

今回初めて復興ボランティアに参加させていただきましたが、「何もない。」が第一印象でした。

津波はこんなにも一瞬で人の生活を流してしまうのかと思いました。そんな中、漁港等でのボランティアを行いました。現地の人はとても温かく、そして団結力を感じました。全国からのボランティアの人たちや、地元の人たちと作業を行い、その団結の中に入れていただきたくてとてもうれしく思いました。

今回だけのボランティアに限らず、自分に出来ることを考え、行動していこうと感じました。参加させていただきました。有難うございました。

被災された人の気持ち

[電力総連関西電力労組木曾川支部・藤澤 秀司]

2回目の参加でした。今回は田んぼの瓦礫作業と海洋のメカブ作業でした。

本当に良い経験をさせて頂きました。

南三陸町の被災されて何も無くなった状況を見て、亡くなった方の無念な気持ちや津波の恐ろしさを考えると胸が締め付けられました。

被災された方の話を聞いて感じたのは、現地に来て、見て、そして話を聞かないと真実は分からないのだという事を知りました。

今回で連合長野のボランティアは終了という事ですが、今後も何らかの形で東北の復興支援に協力できるようにしたいです。

[電力総連関西電力労組木曾川支部・岡崎 和樹]

前回は引き続き参加しました。

前回の作業は人力による瓦礫の処理作業、今回の作業は畑の整備と漁港でのめかぶ削ぎ作業でした。まだまだ「人の手」が必要な作業が残っていると感じました。

漁港の作業では地元の方と会話する機会がありましたが、とにかく明るく元気であったことが、とても印象的でした。

被災地の景色は2ヶ月前とあまり変化はありませんでしたが、被災地の方々の心の復興は着々と進んでいるように感じました。

[電力総連環境総合テクノス労組・水上 清志]

今回初めて参加させて頂きました。

復興がすすんでいるとはいえ、南三陸町はまだまだ遅れているという現実を目の当たりにし、石拾いや漁港の方の手伝いを通じ、人の手でやらなくてはならないことがまだまだたくさん残っているんだなと感じました。

芳賀さんの話、漁港の方の話を伺うと言葉にならないくらい胸が痛い気持ちになりました。

テレビで見ることのできない現地の様子を実際に見て、肌で感じ、現状を知ることができたことが何よりも良かったと思います。

毎日の生活の中で、直接的に力になるような支援活動はできませんが、購入したボランティアTシャツを着ながら、毎日忘れずにいることで心身ともに生活し、復興活動をしている方の頑張りを感じていたいと思います。

そして自分の目で見えてきたことを会社の方、家族、友人などに伝えることにより、現状を知らない方に伝えていく支援活動を積極的にしていきたいと思います。

これからまた、このような活動に参加できる機会があれば、積極的に力になりたいと思います。貴重な体験をありがとうございました。

[基幹労連 I H I ターボ労組・野知里 彩]

今回、私がボランティアに参加して思った事は、やはりテレビや新聞で見た事聞いた事と実際に南三陸町に行ってみてでは全く違って、本当にショックを受けました。

町の人達の大切な思い出がたくさんつまったこの南三陸町の全てを一瞬で奪った津波が心から恐

ろしく思いました。

さんさん商店街の語り部の方の話を聞いたり、漁師の方々と話した時、こんなに前を向いて頑張ろう!!と思って歩いている人達がいれば、南三陸町は必ず前に進んでいけると心から思いました。

今回のボランティアで少しでも町の人達の役に立てていけば喜ばしいと思います。

やはり実際にその場所に行って、自分の目で見て、聞いてくると考え方も色々と変わりました。

自分の中で一生心に残ると思います。今回はボランティアに参加させていただきありがとうございました。

[基幹労連 I H I ターボ労組・石川 カルメラ]

震災の被災地で自分が何が出来るのか、自分が少しでも役に立てるようにボランティア活動に参加しました。

今回初めてボランティア活動に参加して、本当にいい経験をさせていただきました。

テレビなどで見たことと実際に見た時は本当にショックを受けました。

何もしなければいつまで経っても前に進むことが出来ないが、少しでも踏み出すことで前に進むことが出来るということを感じました。

自分でも機会がありましたら、ボランティアに参加したいと思います。

南三陸町商店街のおばさん、いつまでも笑顔で頑張ってください。

参加した皆様3日間お疲れ様でした。そして事務局の皆様大変ありがとうございました。

[基幹労連 I H I ターボ労組・増田 充康]

3回目の東北復興ボランティアは、初めての南三陸入り。

以前一緒に行った方からの情報では、他と比べると非常に復興の進み方が遅い地域だと聞いていましたが、やはりその通りで、以前行った七ヶ浜などと比べると、2年以上経過しているのにまだこの状態なのかとため息が出てしまいました。

海岸線は鉄骨やコンクリートの土台と電柱以外はほとんど何もない状態。

初めて漁業支援の作業もさせていただきましたが、その建屋も被災の傷が残った状況であり、未だに大半の方々が自宅再建の目途も立っていない状況下で苦しい生活を余儀なくされているようでした。

また、プレハブが並んだ「南三陸さんさん商店街」で津波の怖さ悲惨さを涙ながらに語り継いでいるお母さんのお話なども強く心に残っています。

やはりただ作業するだけではなく、地元の方々と接することでより一層こうして時々訪れることが決して自己満足や無意味なことではないのだと感じました。

自分の感じたことや経験したことを仲間に伝え、何らかの形で支援を末永く続けていくことが大切なのだと再認識しております。

連合長野での表立った活動は今回で一旦ピリオドを打つようですが、この機会を通じて知り合った皆さんとまた活動出来る時が遠くない未来にありそうなので、楽しみにしています。

[JAM甲信タカノ労組・福澤 茜]

3. 1 1 東日本大震災の恐ろしい映像は、当時テレビでよく報道されておりましたが、2年が経過した今、復興状況がどうなっているかなどの現状については、あまりメディアで取り上げられなくな

っていました。そんな時に、今回の復興ボランティアのお話をいただき、メディアだけでは伝わらない被災地の状況を自分の目で見て感じたいと思い、すぐに応募いたしました。

私は東方地方を訪れるのは初めてでしたが、バスの中から見る仙台市の中心部は大震災の影響を感じさせないくらい復興しているように感じました。ただ、南三陸町に近づくにつれて、大震災の爪痕や津波の恐ろしさを目の当たりにし、身震いをしたのを覚えています。

大きな瓦礫が撤去された平らな土地に家の基礎やビルの鉄骨だけが残され、海水で腐ってしまった木を切った跡、津波が押し寄せてきて変形したガードレールなど、想像をはるかに超える恐ろしさでした。そして、コンビニやガソリンスタンドが仮設の店舗で営業されていて、まだまだ復興には時間がかかると思いました。

そんな中、1日目と2日目は農地の瓦礫や石拾いを行いました。今回が2回目で仕上げに近いというお話しでスタートしましたが、掘れば掘るほど大きな石などが出てきて驚きました。約40名での作業が終わった後、自分たちの作業を行った場所を見渡すと、一面農地が広がっている中のほんのごくわずかな一部分にすぎず、ここまで来るのには多くのボランティアさんが関わり、関わった皆さんの想いが1つとなって大きなパワーに繋がっているのだと、ボランティアの皆さんのすごさを知ることができました。

そして、最終日の3日目は、漁業支援として現地の方と一緒にめかぶ取りを行いました。現地の方と直接交流をしながら滅多に経験することができない作業ができたことは大変貴重な経験であり、とても印象に残っています。

最後に、3日間で一番印象に残っていることは、語り部の芳賀さんが辛いのに大震災当時の状況を涙ながらに語ってくださった姿や、漁業支援で指導して下さった方がこの辺はたいしたことがなかったと笑いながら、高さ10m以上の津波から必死に逃げた状況をお話してくださった姿、そして受け入れていただくだけでもうれしいことですが、現地の方がジュースを用意して下さったり、帰る際に自家製の佃煮をプレゼントして下さったりと、本当に温かく受け入れていただけたことにとっても感激いたしました。

今回直接見て感じたことを忘れずに、そして最初で最後のボランティア活動にならないように、自分ができることを少しでも継続して行っていきたいと思えます。

同じ想いの仲間と内容の濃い充実した3日間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

[JAM甲信タカノ労組・池田 香]

ボランティアに参加したのは、自分の目で被災地の状況を見たいと思っていながら何も行動せず2年以上が過ぎてしまい、早く行かねばと焦りを感じていた時だった。

南三陸町は本当にここに街があったのだろうかと思えないくらいに、ただただ土色の地面が広がっていた。大きな瓦礫は既に撤去され現在は平らな地面だけが見えている。わずかに残されているのは建物の鉄筋の骨組みだけで、それも外階段の手すりや外壁、ガードレールは津波の影響で皆、海から陸の方向にひしゃげていて津波の威力の恐ろしさをまじまじと感じた。

農地の瓦礫除去作業では20cm以上もある大きな石も浅い地面に残されていた。川にある角の取れた石や玄関タイルの破片もあり、すべて津波の運んできたものかと考えると、海から離れたこの場所まで津波が到達したことが信じられなかった。

報道で沢山見てきた状況だが、現地に来て、津波の規模、破壊力、どちらもが恐ろしいと改めて実

感した。そして2年経った今でも、津波のあった場所に新しく出来たものはなく、畑も始められない、漁は始めたばかりだそうだ。これまでの瓦礫除去も現地とボランティアの方の努力によってここまで整地されてきている訳だが、生活を取り戻すにはあと何年かかるだろうか。長野に戻った私に力になれることはないのだが、せめて周囲に見てきた現状を伝え、自分自身で忘れないでいようと思う。

[自治労長野県職員労組諏訪支部・柄澤 裕美]

半年ぶりに訪れた南三陸町は、私の中で抱いていた、“取り残された被災地”の印象を払拭するかのよう、震災遺構はほぼ撤去され、見た目にはほかの被災地とさほど変わらない、見渡す限りの更地が続いていました。

ちょうど1年前のGWに、同じ南三陸町で、壊滅した県営住宅や志津川病院の泥出しやがれき撤去に汗した光景が甦ってきます。ほかの被災地では、もうこの頃からボランティア活動の内容が産業支援、農業支援へと移行しつつある中で、南三陸町の現実を突きつけられた気がしました。

あれから1年、今回の1・2日目の作業現場となった農地は、あとは石を取り除くだけというところまで進んでいました。ここにたどり着くまでに、どれほどのマンパワーが集結したでしょうか。人の手の温かさが伝わってくるようでした。

個々のボランティア活動は「点」でしかありませんが、その点がいくつも繋がって「線」となり、それがやがて「面」、そして「空間」「目に見えぬもの」へと広がっていく一、それが復興の姿なのかなと思います。

今年5月の始め、あるメディアに南相馬市で81歳のおばあさんが1人で自宅の土を運んでいる姿が紹介されました。自宅を襲った大量の泥はボランティアが1年かけて全部出しましたが、ボランティアが来なくなった今は、避難生活をしながら1人自宅の片付けをしている、というものでした。

被災地間で復興のスピードが違うように、被災者もみんなが横並びで一斉に進んでいるわけではありません。2年以上経った今でも現実を受け入れられない、前に進めないという人がいることもまた事実です。その事実をしっかりと受け止めなければいけないと思っています。また、本当の意味で「震災による被害」が出てくるのはこれからなのかもしれません。だから、これからも細くても長く続く支援を続けていこうと思っています。

今回の第16次派遣で連合長野としての現地での支援活動に一旦区切りを付ける形となりますが、これまで、この連合の呼びかけに背中を押されて被災地に足を運んだという方もいるでしょうし、その人の話を聞いた誰かが、自分も行こうと思ってくれたかもしれません。バラバラの個人ボランティアの力を集めて被災地に届けるという役割を果たしていただいた連合長野の取り組みに感謝を申し上げます。

お世話になりました成沢さん、三木さん、そして3日間温かく支えていただいた副班長さんはじめ班員の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

[自治労松本市職員組合・古田 和之]

私は、絵を描くことが大好きです。それは、「自己表現」の一部だと思っています。

そのせいか、震災というものを自分がどう受け止め、をどう表現すればいいのか分からず、もやもやした気持ちのまま、2年余りが過ぎました。

そんな時に、今回のボランティア活動の存在を知りました。

この3日間で私が経験したことの一つ一つは、かけがえのないものとなりました。

初めて被災地に行ったということ。南三陸町の、今の景色を見て、今の空気に触れ、今そこに住む人の口から語られる言葉を聴く。情報としては既に知っていたはずの、その一つ一つ、その全てがリアルに心に響きました。

語り部の方がおっしゃっていた「帰ってから、ここで感じたことを沢山のの人に話してください。」という想いを知り、一表現者として、自分にできるやり方（言葉）で、感じたことを表現したいと強く思いました。

[自治労松本市職員組合・川窪 茂]

前回（第15次）参加してから、ふたたび南三陸を訪れたいと願っていたボランティアでしたが実現できて、その日が来るのが待ち遠しい日々でした。

まだ暗い時間帯、集合場所である松本合同庁舎前には元気な声の若者たち。その声を聞いただけでも心強く安心した次第でした。

南三陸に近づき、津波の傷跡を見るにつけ心引き締まる思いでした。前回、大勢の皆さんと共に頑張った場所は今どうなっているだろう。あの時、山のようにになって分別した瓦礫は既に無く更地でしたが、その地面の下は前回のままの状態だろうな。いつ発掘されるかわからない被災前の生活用品は今もたぶん変わらない状態だと思います。あの時から時間が止まったまのように感じました。

最初の2日間は、全員横一列になって畑の土を掘って石を分別。休憩時間に近くで作業していた大工さんとの会話にはとてもショックでした。その方が言われた「3月11日、私の息子が通っていた石巻市立大川小学校は、津波により児童108人中70人が亡くなり、息子（5年生）もその一人です。

まだ4人が未だ行方不明なんです。その行方不明の子供たちの搜索も国はやっておらず、現在では家族・保護者が重機を使って搜索を続けています。

息子は早い段階で発見されただけでもありがたかったです、辛かったですね。

でも、いろんなボランティアの皆さんが頑張っているのを見てはとても癒されましたよ。最近、仮設住宅の人の中には家に引きこもる人も多くなってきたが、できれば皆さんのようなボランティアの方々と一緒に作業をし、当時の話を伝えられればいいのにね」と言われました。短時間でしたが、胸が締め付けられるような重い一言一言でした。

途中から更に降り始めた雨にもめげず黙々と泥だらけになりながらの作業はあまり苦になっていない皆の顔でした。帰りの車中から屋根もない仮設のガソリンスタンドで傘を差しながら給油していた従業員の姿が印象的でした。

3日目は漁業支援。初めて経験するメカブの処理作業は新鮮な経験で、これからこのようなお手伝い（支援）もあってもいいのではないかと感じました。

3. 11この日をこれからも決して忘れてはいけない。思い出すことが復興の原点であると強く心に刻みました。今度、南三陸に行ったら作業した場所にどんな作物が育っているか見るのがとても楽しみです。



[自治労松本市職員組合・石井 佑樹]

今回のボランティア活動を通し、特に印象に残ったこと4点を挙げます。

1つは南三陸町の様子です。JRの線路や橋が流されて一部残っている状況、四角い区画で建物のコンクリート基礎の残骸が一面に並んでいる様子、ひしゃげたガードレールなどを見て、大変な衝撃を受けました。

次に初日の作業の先導をされた長期ボランティアの方の言葉です。「国がなかなか動いてくれない。ボランティアでこつこつやっていくしかない現状。」とお話しされていたのが印象に残っています。

3つ目は初日の作業後、さんさん商店街で聞いた芳賀さんの被災体験談です。つらい体験を語っていただき、芳賀さんには感謝の言葉しかありません。

4つ目は、最終日の作業で漁師さん達と触れ合う機会があったのですが、その時の漁師さん達の明るい笑顔です。振り返れば瓦礫の山でしたが、小さな漁港で笑顔で働いている姿はとてものどかで、被災地の様子などで気の滅入っていた私は大変救われました。大変な困難を乗り越えている人達ですから、やはり強いな、凄いなと感じました。

今回このような貴重な体験をさせていただき、連合長野の事務局の皆さん、長野電鉄の皆さんに感謝申し上げます。

[電機連合長野日本電気労組・原 忠博]

連合ボランティアとしては3回目の参加をさせていただきました。今回は申込み受付を開始した日の朝一には定員オーバーとなったとのことで、参加したい意志のある方が多かったということも素晴らしいことだと思いましたが、その参加できなかった方々の思いも心に留めて参加しました。

1日目・2日目の作業は、前回伺った大雄寺のすぐ傍の田畑で農地再生のための石拾いでした。この田畑に作物が植えられて実ることを心から期待すると共に、それをまた見にきたい！と思える作業でした。

大雄寺さんでは、参道を紫陽花でいっぱいになりたいと前回聞いていたので、植えられ始めていたのを見て少しずつ描いている姿に向かっているんだなと実感しましたし、門を新たに建てられていたのも復興を目指しているということを感じることができる光景でした。

そこでの作業中で一番印象深かったのは、自転車に乗った子供達が遊びに行く所なのか数人で歩いていることでした。よくよく思い出してみると今までは子供達が遊んでいるような所を見たことがなかった気がしますし、自分なりに考えてみると今までは危険な箇所もあつたりとか爪痕があるような所にはあまり行かせなかったのかもしれませんが・・・それができるようになったのも復興に向けて更に前向きになってきている証しなのかと感じました。

今回の最終日は、漁業支援で「めかぶ削ぎ」を初めてさせていただきました。慣れないこともあり手は遅かったと思いますが、めかぶの原形を知ることができたし、わかめの茎の根本部分だということを知ってもらったりとか現地の方々とコミュニケーションをとりながらの作業は有難いものでしたし、多少ではありますが現地の漁業の現状に触れることができた内容でした。

滞在中に見たテレビニュースでは、復興予算が付いているのに使えてないとか、郡山では震災後初めて外で運動会ができたとかいう内容も目にしました。震災からまだ2年2ヶ月。人間イヤなことは忘れられるようにできるとよく聞きます。また順応していくようにもできると思います。しかし、まだまだ自分がやらせてもらえることはたくさんあるのではないかと改めて感じました。形は変われど、これからも活動を続けていきたいですし、南三陸にもまた行きたい！と強く思いました。

[自治労長野県職員労組長野支部・宇田 寛]

自分は看護師という職業から、災害時ボランティアでは医療救護の経験しかありません。災害医療はチームで臨む為、短期間の活動で次チームと交代し被災地を離れます。

今回、職業は関係無くボランティアに参加する機会を頂きました。様々な業種の方と、あの日から一年以上経った南三陸で、田畑の整備を行ったり、港で収穫の手伝いをさせて頂きました。

田畑の整備では雨が段々と強くなり、泥の中、石など必要のないものを拾い出ただけですが、あの日、津波に流されてしまった大切なものを、この地で泥の中に探し続けた人の気持ちはどの様であったか。また港では海風が冷たく、ご指導頂いた漁師さんから、海には海の支度があると教わり、防寒には気を付けても体が震える寒さ。あの夜、濡れた衣服で救助を待った人びとの寒さ、不安はいかほどのものであったか。南三陸に立ち、改めて考えさせられました。

南三陸の防災対策庁舎は、まだ周囲が更地となる前に海沿いから見ていましたが、近づいてはいけないとの思いが強くありました。月命日の黙祷のため庁舎前に並びましたが、被災した地は何処でも悲しみ、苦しみがあります。同じ悲劇が繰り返されないことを、ただ祈るしかできませんでした。

この機会を作って頂いた連合長野、長電観光の関係者様、そしてボランティア参加者に感謝いたします。

[自治労県立病院機構労組須坂病院支部・黒鳥 光則]

日々の日常生活に追われ、徐々に脳裏から大震災の記憶が薄くなっている自分がいました。今まで、ボランティア募集の記事を目にしなが、またの機会にしようと思って都合よく逃げていたのですが、いつ行くの?の言葉に今回初めて参加させていただきました。

医療救護支援には、当院災害派遣チームが石巻市や栄村に急行しお手伝いをさせて頂いていますが、医療の分野にとらわれず、復興の為なら何でもお手伝いさせて頂きたいとの思いと、2年2カ月が経過した今の南三陸町の状況を見て、忘れてはいけない現実を心に焼き付ける思いがあったことが参加の動機でした。

語り部ガイドの芳賀さんより当時のお話を聞き、話したくないことを伝えていかなければならないお気持ちに目頭が熱くなりました。また、最終日には袖浜漁港で、わかめの芽カブ削ぎ作業を手伝わせて頂きましたが、午前中その漁師さんからもぎりぎりの状況であったとお話をお聞きし、今も岩の松に網が引っ掛かったままの状態だと見せて下さいました。ホタテやホヤの養殖には今後最低3年かかるのお話に、驚きと国を挙げての支援はどこに?と感じてしまいました。そして、防災対策庁舎や冠婚会館が今なお残っている意味を理解し、観光でいいので先ずは「行きましょう!」と伝えていきたいです。

たった2泊3日の支援でしたが、一生私の心に刻まれた時間でした。情報を細かく伝えて下さり、大切なものを教えて下さった成沢様に感謝申し上げます、仙台の夜を充実した思い出にしてくださった3班の皆様に感謝申し上げます。

追伸

スーパーの鮮魚コーナーでは三陸町産のわかめが気になっています。それと、キジが鳴く自然の中で、立派な稲が育つといいですね。

[農団労ながの農協労組・羽尾 昭一]

現地に到着した時に目に入った光景は沿岸部にかけてあつただろう町並みが何も無い光景でした。

初日の作業は、農地の石撤去作業を横一列に並んでピッケルを使いながら掘り起こしの作業を行いました。2日目も小雨のなか1日目と同様の作業を行い、途中で旧南三陸町防災対策庁舎前にて黙祷を行いました。

前回、ボランティアで訪れた七ヶ浜町では「2年ぶりに田に水が張られ」と言う文章をボランティアセンターホームページで見て、今回作業をした農地も同じように2年先、何年か先には、農家の方々が農地として作物が作れるようになることが出来れば、と思いながら作業をし、最終日の3日目は漁業支援にてメカブ削ぎを冷たい海風の中作業しました。

作業をさせていただく自分たちにお茶を出して下さったり、帰りには手作りの佃煮を手渡して下さったりと温かい心遣いをいただき、逆に自分たちが温かい気持になりました。その時の漁師さんの話では、養殖しているホタテやホヤなどは3年から4年経たないと出荷できないから先の事を見据えながらやっていかなくてはいけないとの話でした。

初日の作業後に語り部の方から震災当時の話として、津波が16メートルあったこと、親兄弟や親戚など肉親を亡くしている方が多く、震災についての捉え方も違うことからお互いのことを話せないでいること、お話をしていただいた方も肉親を亡くしており、話すのが辛いですが誰かが話していかなくてはいけないとの思いで各地での活動を行っているそうです。

まだまだ作業することはあるとボランティアセンターの方が言うておりました。しかし月日が過ぎるごとにボランティアの人数も少なくなっているように思います。活動を続ける事は大切なことではあるけれども、先が分からない状態において続ける事の大変さや月日が過ぎることにより意識が薄くなって行くことはあると思いますが、求められるニーズがあれば活動をしていかなくてはいけないと思いました。

[連合諏訪地協・矢崎 泰子]

今こうしてこの原稿に向かいながらも、一向にして言葉が見つからず、呻吟しては書き直しを続けている。現状を知った今、言葉を躊躇い、慎んでしまうのだ。

私たち『第16次復興支援ボランティア40名』が向かった宮城県南三陸町は、防災無線で最後まで町民に避難を呼びかけ津波の犠牲となられた遠藤未希さんの勤務先である防災対策庁舎の骨組だけがポツンと残されているだけだった。無念さを象徴するかのよう。かつては、漁港を取り囲むように活気ある商店街が軒を連ね、緑豊かな農村風景が広がり平穏な生活の営みがあったであろう南三陸町。言葉もない。でも、震災から二年、ここまできたのだ。道路が整備され、車が走り、普通の生活が戻りつつあるのだ。悲しみと共存しながらも。

語り部の芳賀タエ子さんの言葉「一緒に逃げたはずの肉親が、振り返った時にはそこに姿がなく、自分だけが助かってしまった自責の念と無力感に打ちひしがれた日々。でも生かされたのだから生きていくしかない」。涙の裏側に隠された決意の声にただただ項垂れるだけだった。でもきっと芳賀さんなら、大切な大切な肉親の人生の続きを力強く歩んでいこうと思う。そう願わずにはられない。

三日間の私たちのボランティア作業など、ここに生きていく人々の心労を思えば取るに足らないものである。元気な私たちが、傷を負った人々、町に力を貸すことなどあたりまえなことなのだろう。そのあたりまえなことを、何故私は、二年間躊躇していたのだろう。

[U Aゼンセン片倉機器労組・秋山 直美]

第16次復興支援ボランティアに参加させていただきありがとうございました。

連合長野として行うボランティアが終了になるとの事で、沢山の方々が参加を希望された中で今回参加させていただく事が出来ました。

作業内容は畑の石を取除く作業とめかぶの茎を取る作業でした。前回作業を行った時よりも片付いてきている事を感じましたが、同時に、まだまだ行っていく事が沢山あるという事も感じました。

段々と復興への協力が少なくなっているのが現状だと思います。そして、もう大分元の状態になってきているんじゃないの？と思っている人が多いと思います。そんな中、今回参加する事で、まだまだ道程が遠いと感じる事ができ、一日でも早く復興できる様頑張っている人達と出会う事が出来ました。

これから先ボランティアという参加の機会は減ってしまうかもしれませんが、自分が知った東北を忘れず、何か出来る事を一つでも多く行動に移していきたいと思います。

[電力総連東京電力労組松本総支部・国島 健矢]

連合長野復興支援ボランティアへの参加は、2度目で、前回は七ヶ浜へいきました。

今回の南三陸町は、復興が遅れている事を事前に聞いていましたが、実際に現地道路と空き地、仮設のコンビニ、ガソリンスタンド等を見て、何も無いことに驚きました。

初日、二日目は、農地の石、瓦礫の撤去作業、三日目は、現地の方々とメカブの芯取り作業、という、内容はとても地道なものでしたが、この、小さな作業を続けて積み重ねることが、復興につながるんだなと実感しました。

3日間とても濃い体験をさせていただきありがとうございました。

[電力総連東京電力労組松本総支部・良川 孝行]

昨年の七ヶ浜町に続き、今回初めて南三陸町でのボランティアに参加させていただきました。

バスがかつての町の中心部にさしかかった時、その光景に言葉を失いました。

そこに町があったとは到底信じられないような、辺り一面の更地。鉄骨だけとなり無惨な姿で残る防災庁舎。一瞬で町を壊滅させ、多くの人の命を奪った津波の恐ろしさと、2年経ってもなかなか復興が進まない現実に愕然とさせられました。

今回の作業は田圃の石拾いと、漁業支援をさせて頂きましたが、まだまだ大勢のボランティアの力を必要とする作業があると感じました。私自身も時間の許す限りまたボランティアに参加したいと思います。

しかし現実には団体・個人とも徐々にボランティアの参加者は減っていることも知りました。高速無料化の打ち切りや、マスコミ等で取り上げる機会が減っていることが一因かと思います。政府には高速無料化の復活を含めたボランティアへの支援をもっとしていただきたいと強く願います。

[電力総連東京電力労組松本総支部・後藤 利博]

この度、第16次復興支援ボランティアに参加させて頂きました。

私は、第3次並びに第8次と参加させて頂き、今回の参加で3回目の参加となりましたが、今回の活動地点である南三陸町という事で私にとって、初めての活動場所でした。津波の影響で建物がほとんど残っておらず、復興があまり進んでいない印象を受けましたが、さんさん商店街等、町民達が盛

り上げている物産店もあり、少しずつ前に進んでいる印象を受けました。（私が以前訪れた際には、さんさん商店街はありませんでした。）

作業については、1日目と2日目は田畑の石拾い、3日目は、漁港でメカブの加工作業をお手伝いさせて頂きました。私が活動に参加して初めての作業となったメカブの加工作業は、コンテナに座り、地元の方と会話をしながらの作業となり、地元に着した作業が出来ました。

その際に震災の話も聞かせて頂きましたが、ツライ話しであるのに色々話しをして下さりメカブの作業も淡々と進めていて、逆に元気を頂いた感じがありました。

連合長野が派遣する活動は今回が最後という事ですが、3回のボランティア活動に参加させて頂き、ボランティア活動の切っ掛けを与えて頂いたような気がします。これからは、個人的に活動に参加させて頂き、東北の復興に少しでも協力していきたいと思います。

[電力総連東京電力労組松本総支部・上村 了一]

今回で3回目の復興支援ボランティアに参加しました。1回目・2回目のボランティアは七ヶ浜での活動でしたが、今回は初めて南三陸町での活動でした。

活動内容としては、畑のガレキや石の除去と漁業支援でした。漁業支援では現地の方と交流を持つ事が出来て良い経験になりました。

また、語り部の芳賀さんには、思いだすのも辛いであろう震災当時の話をしていただき心打たれる思いでした。

実際に現地を見て、復興にはまだまだ時間がかかると思いましたし、自分の中の震災の記憶が少しずつ薄れていっている中で現地を見る事が出来て良かったと思います。

連合長野としてボランティアツアーは今回が最後となりますが、これからも自分が出来る事で復興に協力していきたいと思います。

[自治労長野県職員労組本庁支部・近藤 有美]

南三陸町の海を見下ろす高台に、一軒のペンションがあります。津波こそ免れたものの、地震の被害があり住むには危険と判断されたため、オーナーさん御家族は仮設住宅で生活しています。ペンションのキッチンを使って、息子さんがお菓子を焼いて販売していると知り、初めて買いに行ったのはまだ寒い頃。“お山のマドレーヌ”が評判のお店を何度か訪ねる内に、息子さんからお話を伺うようになりました。

「ボランティアではなく、雇用する人手を探している。」震災後、町外へ転居してしまった方が多く、現地では働き手が減っています。そしてその少ない働き手も、瓦礫処理の工場など給料が高かったり、勤務時間や勤務日数が一定で毎月の給料の額がある程度決まっていたりする仕事に既に就いているのだそうです。ペンションを再建して再開したいオーナーさんの言葉も同様。ペンションの仕事の忙しい時期や時間だけ来てくれていた近所の方が転居してしまい、同様の条件では働いてくれる人がいないと言います。もちろん私は働き手にはなれないので、現地の顔見知りの方にお話ししたり、お菓子を買ったりすることしかできません。

漁業も人手は不足しており、ワカメ収穫最盛期には何軒かの漁師さん宅から、ボランティアセンターを通さず、個人的にでも来てほしいと言われました。私は行けても月に4～5日で、あてにしてもらえるほど頻繁には行けません。

月日が経ち、確実にボランティアは減っています。南三陸町ボランティアセンタースタッフによれ

ば、暖かくなり漁業支援は一段落ですが、農業支援や瓦礫撤去、草刈りなど、優先順位をつけかねる位にニーズはあるそうです。

ボランティアにできることは限られていますが、確実に現地の方のお役に立てていると、これまで参加された方皆さんが感じていると思います。

また南三陸へ、東北へ行きませんか。

[自治労立科町職員労組・片岡 雅也]

今回偶然にも参加者募集の案内を手にすることができ、復興支援ボランティアに参加させていただきました。

震災発生から2年2ヶ月が経過した南三陸町を訪れてみると、志津川地区の海岸付近では未だ更地のままである土地が一面に広がり、コンクリートの塊が山積みになっている様子を見て、これが被災地の現状なのと言葉を失いました。震災発生当時、テレビで津波の状況が映し出され、それをただ見ることしかできなかったあの時を思い出し、胸が締めつけられる思いでした。

1日目と2日目に作業をした田尻畑地区は、海が見えないほど離れているものの津波の被害があり、ガードレールが曲がったまま残されていたり、橋の欄干がもぎとられ数十m先の窪みに落ちたままになっており、あらためて津波の恐ろしさを感じるとともに、復旧・復興が進んでいないという現状を目の当たりにしました。

ボランティア活動は3日間でしたが、わずかでも復興に繋がってくればという思いで作業を行いました。

次に南三陸町を訪れたとき、今より少しでも違った様子が見られればいいなと思っています。

この活動を通じて見たことや感じたことを職場や家族に伝えていくとともに、これからもどんな形であれ自分でできることを続けていきたいと思っています。

[電力総連東京電力労組松本総支部・西尾 浩明]

ボランティア活動は、震災発生から4カ月後に連合本部の活動に参加する機会を得て初めて参加しました。しかし、日々の生活に追われていると貴重な自分の時間を割いて参加することは、正直かなり気持ちにムチを入れないと難しく、それ以来参加していませんでした。今回で連合長野ボランティアが最後になると聞き、ムチを入れて参加させていただきました。

参加してみて、現地を見て、聞いて、感じるができるボランティアは、やはり“いい”と思いました。また、改めてボランティア活動の重要さも感じることができました。

現地でのボランティアの際、地元の方から「津波が来たらとにかくあっちに逃げろ」とか「こっちに逃げろ」と言われます。津波を見てその恐ろしさを知り、二度と同じようなことにならないよう、本当に皆さんが願っているからこそと思います。津波は、また必ずやって来ますが、人の記憶は忘れ易いものです。被災地の方のみならず出来るだけ多くの方が語り続けば、その時に救われるかもしれません。ボランティア活動は、今困っている人達を助けるだけでなく、語り継ぐことで将来の人達をも助けることができると思います。ボランティアで見てこと、聞いたこと、感じたことを、多くの人達に伝えていきたいと思っています。

そして災害はどこでも起こります。いつボランティアが必要になるか分かりません。

今回たまたま一緒に作業をした方は、大阪から個人で南三陸町までボランティアに来ている方でした。その方は、長野県で起きた地滑り災害時に長野県に来ていただいたそうです。もしもの時に、近

くから駆け付けることが出来れば、それだけ復旧も早くなります。その時のためにボランティアの気持ちを大切にしたいと思います。

今回は有難うございました。

追悼の歌

しあわせ運べるように (ふるさとバージョン)

作詞・作曲 臼井真

編曲 川上昌裕

この歌の作詞・作曲の臼井真さんは神戸市内の小学校の音楽教師。

1995年1月17日の阪神淡路大震災で自宅が全壊、震災2週間後のTVニュースで変わり果てた生まれ育った街の姿を見て衝撃を受け、わずか10分で作った“神戸復興のシンボル曲”です。

歌詞の「」内は「神戸」ですが、東日本大震災の被災地に広がり、“ふるさとバージョン”として「ふるさと」又は「被災地の地名」を入れて歌われています。

インターネットで検索すれば歌を聞けます。

地震にも 負けない 強い心をもって
亡くなった方々のぶんも 毎日を 大切に 生きてゆこう
傷ついた「南三陸」を もとの姿にもどそう
支えあう心と 明日への 希望を胸に
響きわたれ ぼくたちの歌
生まれ変わる 「南三陸」のまちに
届けたい わたしたちの歌 しあわせ 運べるように

地震にも 負けない 強い絆をつくり
亡くなった方々のぶんも 毎日を 大切に 生きてゆこう
傷ついた「南三陸」を もとの姿にもどそう
やさしい春の光のような 未来を夢み
響きわたれ ぼくたちの歌
生まれ変わる 「南三陸」のまちに
届けたい わたしたちの歌 しあわせ 運べるように

響きわたれ ぼくたちの歌
生まれ変わる 「南三陸」のまちに
届けたい わたしたちの歌 しあわせ 運べるように
届けたい わたしたちの歌 しあわせ 運べるように